

梅雨入りの晩、おかしな夢をみた。

ホテルにチェックインした自分が案内された部屋は、6帖一間で畳は日に焼け、窓ガラスはうねり、襖はやぶれ、傾いたちゃぶ台には魔法瓶がひとつ置いてあった。

世の中レトロブームとはいえ、こういうホテルに三丁目の下宿部屋があるのにおどろいたが、これも一人旅には面白そうだと、スーツケースを置いた。

しばらくして夕食の時間になり、地下のレストラン(ここは平成の造りだった)に行き、テーブルに着くと、目の前に作家の江宮隆之さんが憂鬱な顔をして箸をすすめていた。

「まあ、このホテルにカンヅメで書いていらっしゃるのですか？」

「そうなんだが、部屋がゴージャスすぎて、山本勘助の続編が、ちっとも書けないんだよ」

わたしはすぐに、自分の案内された部屋が戦国時代ほどレトロではないが、畳敷きで西日があたり、ちょっと落ちつくんですよと話し、交換しませんか？ ともちかけた。

江宮氏は、まさかこのホテルで？ と一瞬いぶかしげだったが、原稿締め切りがせまっているので、それしか方法がないかと、夕食を中断して立ち上がり、商談成立。

わたしはさっそくスーツケースをとりに行き、江宮氏に言われた階に向かった。

ところが、板張りの長い廊下を歩けども、歩けども、階段も出口もない。やっと廊下の突き当たりにたどりついたら、そこは断崖絶壁で、眼下の谷底では山本 勘助が原稿用紙と闘っていた。ああ、そうだったのか、時代小説を編む作家は、書くときは主人公に変身するのだ！ とんでもない秘密を知った。とにかく、原稿は順調にすすんでいるようだ。

いっぽう自分は、交換してもらったゴージャスな部屋が見つからず、三丁目の下宿屋の廊下を一晩中歩きつづけ、目覚めたときは、もうくたくただった。夢も希望もない。

江宮隆之さん、おしえてください、夢のない夢の筋書きは、いったいだれが何に変身して書くのですか？